



白鳥が羽ばたく様子を模したデンカビッグスワンスタジアム

新潟のスポーツ文化が息吹く

デンカの名を持つ 競技場

新潟市中央区、鳥屋野潟のほとりにたたずむ新潟スタジアム、通称「デンカビッグスワンスタジアム」をご存知だろうか。

2002年のサッカーW杯の会場の一つとして竣工し、今年20周年を迎える当スタジアムは、2014年以来、デンカの命名権取得により現在の通称で知られるようになった。翼を広げて飛び立つ白鳥のような見た目が特徴的で、収容人数は4万人強。サッカーJ2・アルビレックス新潟のホームスタジアムでもあり、質高く整備されたフィールドは「Jリーグベストピッチ賞」に通算6回表彰された。このスタジアムを拠点にデンカはスポンサー活動にも注力しており、2019年から毎年開催されている「Denka アスレチックスチャレンジカップ^{*1}」もその一つだ。

そんな機能性と美を兼ね備えたスタジアムだが、デンカが命名権取得に乗り出した背景には、新潟県とデンカとの深い関係があった。県内にはデンカグループ全体の3分の1を占める約2,000人が勤務している。また、1921年の操業以来の主力工場である青海工場（糸魚川市）の周辺には古くから自家水力発電所を有し、新設も予定。同工場では、2020年、新型コロナウイルス感染症治療薬として期待される抗インフルエンザ薬「アピガン^{®*2}」の原料を生産した。また、五泉事業所（五泉市）では、同感染症の簡易検査キット「クイックナビ[™]-COVID19 Ag」の生産が始まった。新潟はデンカにとって古今を通じて重要な場所であり続けている。

スタジアムでの地域に根ざしたスポーツ振興は、新潟とデンカの結びつきをますます強めるだろう。デンカビッグスワンスタジアムは、新潟とデンカが世界へ、そして未来へ羽ばたくフィールドとなるはずだ。

^{*1}日本陸上競技連盟（JAAF）が後援し、全国各地で開催されるトラック&フィールド大会「日本グランプリシリーズ」の新潟大会にあたる。世界で活躍できるアスリートの育成を目指す。
^{*2}「アピガン」は富士フイルム富山化学株式会社の登録商標です。



表紙の写真

「南三陸町震災復興祈念公園の中橋」
震災復興祈念公園は、震災の記憶と教訓を次世代へ伝える場所として2020年に開園しました。同公園内にある中橋は南三陸杉を利用したウッドデッキの太鼓橋で、南三陸町の復興の象徴となっています。



The DenkaWay

Summer

2021 | Vol.08

写真提供：南三陸町



東日本大震災から10年

想いを伝え、未来につなげる

Contents

- 2 Challengers for Denka Value-Up
社会にとってかけがえのない存在となるために
- 8 Think INNOVATION
「直感」の余白
Deportare Partners 代表/元陸上選手
為末 大氏

- 9 Amazing the World with Innovation
東日本大震災から10年
想いを伝え、未来につなげる
- 17 DENKA TOPICS
- 18 LINK GLOBALLY, LINK FUTURE
- 20 ぐんばいコラム



社会にとって かけがえのない存在となるために

2021年4月より、「Denka Value-Up」今後2年間の取り組みがスタートしました。

デンカグループが「社会にとってかけがえのない存在」となるために、3つの「Value-Up」を実現し、さらなる成長を遂げていきます。

Specialty-Fusion Company へは はっきりとした道筋を示せた3年間

2018年より、デンカグループは世界に存在感を示すスペシャリティの融合体「Specialty-Fusion Company」となることを目指し、経営計画「Denka Value-Up」を推進してきました。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、過去最高益を達成できたほか、「環境・エネルギー」「ヘルスケア」を中心に、スペシャリティ事業において着実な成果が現れています。

2021年、私たちはこれまでの成果と新たに見えてきた課題を整理し、今後2年間の新たな戦略を再設定しました。「Denka Value-Up」の最終年度である2022年には、営業利益500億円という目標を掲げています。2018～2020年度の3年間における最も大きな成果は、このような「Specialty-Fusion Company」の実現に向けた、はっきりとした道筋を示せたことです。これは、デンカグループの一人ひとりの努力の賜物に他なりません。コロナ禍にありながらも、生産を止めるまいと尽力してくれた製造現場の皆さんをはじめ、グローバルの全社員に向けて、改めて感謝を申し上げます。

ポストコロナの社会構造変化やニューノー

マルな時代において、企業は「真に社会に必要とされる存在」でなければ、淘汰される時代に入っています。また、世界が向き合う社会課題に対しても、真っ向から立ち向かっていかなければなりません。デンカグループは、SDGsを羅針盤とした社会課題の解決を経営課題として明確に位置付け、今後2年間の取り組みを通じて「社会にとってかけがえのない存在」を目指していきます。そのために実現していくのが、「事業」「環境」「人財」の「3つのValue-Up」です。

社員、そしてステークホルダーが “誇り”に思えるような企業へ

「Denka Value-Up」の根幹である「事業Value-Up」では「誰よりも上手くできる仕事への集中」による「ポートフォリオ変革」と、さらなる「スペシャリティ化」の実現に注力します。他社の追随を許さない世界トップレベルの事業に集中する「ポートフォリオ変革」を実行する上で大切なのは、現在取り組んでいる事業が本当に「誰よりも上手く」できているかを見つめ直し、行動に移すことです。社員の皆さんには、自分の仕事を「誰よりも上手く」行うための方法を考え、その内容を積極的に発信してほしい。一人ひとりのValue-Upが、企業、ひいては世界の

Value-Upにつながると私は信じています。

また、「革新的プロセス」では、製造現場における3K職場の撤廃や社員が安心して仕事に打ち込める“心の安全”の確保に引き続き取り組んでいきます。

「環境Value-Up」では、化学メーカーとしての責任を果たすべく、2030年度に温室効果ガス排出量の50%削減、2050年度にカーボンニュートラル実現という新たな目標を掲げました。中長期的な視点で、CCUS（CO₂の回収・貯留・有効利用技術）の開発・実装展開などに挑戦していきます。

「人財Value-Up」では、人財教育、ダイバーシティ、健康などの人財戦略を最重要と位置付け、社員が「働きがい」や「仕事を通じた成長」を実感できる企業を目指していきます。また、社員が十分に能力を発揮できる環境づくりなど、健康経営への取り組みも継続してまいります。

私が目指すのは、デンカグループを、社員をはじめ、全てのステークホルダーの皆さまが“誇り”に思えるような企業にすることです。そのためには、この「3つのValue-Up」を実現し、「社会にとってかけがえのない存在」にならなくてはなりません。デンカグループ社員が丸となり、この変革を成し遂げていきましょう。

数値目標

営業利益
500 億円

営業利益率
13 %

スペシャリティ化率
83 %

3つのValue-Up



さらなる高みを目指して

3つのValue-Up、START!!

代表取締役社長
今井 俊夫

Denka Value-Upの “これまで”と“これから”

2018年度から2022年度までの5カ年経営計画としてスタートした「Denka Value-Up」。この度、当社は「Denka Value-Up」のこれまでの成果と新たに見えてきた課題を整理し、2022年度までの戦略を見直しました。「3つのValue-Up」を軸に「社会にとってかけがえのない存在」を目指すとともに、次期経営計画へ向けた“礎”を築いていきます。

2018 » 2020

グローバルで飛躍的な成長を遂げるために、「スペシャリティの融合体 (Specialty-Fusion Company)」となり、「持続的成長」かつ「健全な成長」の実現を目指す。6つの施策を実行し、着実な成果が現れている。

スペシャリティ事業の成長加速

環境・エネルギー

- DAPL・大牟田工場での球状アルミナ能力増強
- 大牟田工場アセチレンブランク生産延長

ヘルスケア

- デンカ生研との合併によるヘルスケア事業の強化
- 新型コロナウイルス抗原迅速診断キット販売開始
- 新型コロナウイルス治療薬候補「アビガン®」用原料「マロン酸ジエチル」生産再開

※「アビガン」は富士フイルム富山化学株式会社の登録商標です。

基盤事業のスペシャリティ化

- DSPLでのMS樹脂増産
- 関係会社合併による最適化（アクロス商事・YKイノアス、住設資材部・中川テクノ）
- 「アゾミン」で蓄積した技術的知見を基盤にバイオスティミュラント市場へ参入

コモディティ事業の位置付け再定義

- 事業撤退（DSPL PS、EVA・サクノール、ファイアレン・β窒化珪素）
- 生産停止（大牟田カーバイド、大牟田石灰窒素）

生産プロセス改革

- 青海工場 操業情報リアルタイムモニタリングシステム導入
- 大牟田工場 AI判定による検査自動化システム導入
- シンガポール・千葉工場 操業異常予兆検知システム導入

研究開発プロセス改革

- テーマ改革：バリューシフトダイアグラムによるスペシャリティビジョンの明確化
- 情報改革：最先端ICT活用による研究開発支援システム構築
- 人材改革：研究要員の戦略的育成とキャリアアップ支援

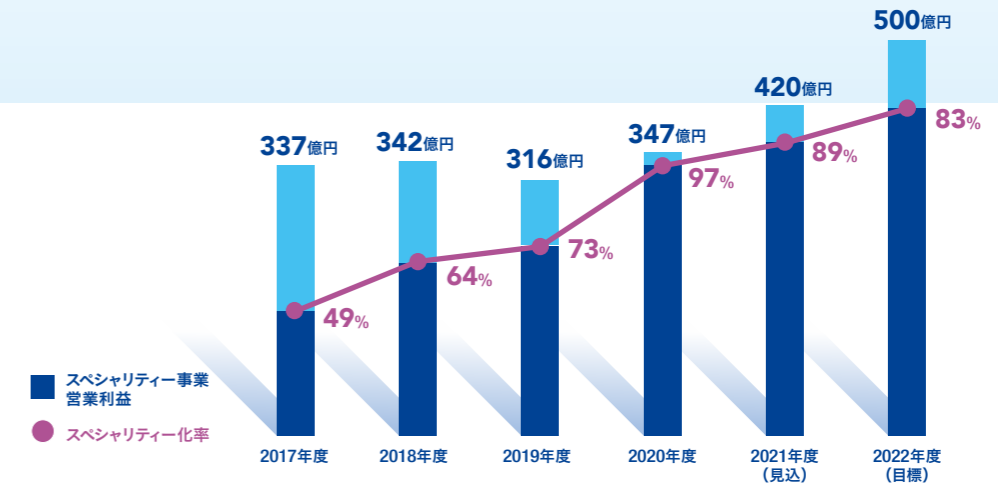
業務プロセス改革・働き方改革

- Office365やオンライン就業管理システムの導入、社内ポータルサイトの本格稼働
- 決裁の電子化、ペーパーレス、会議のオンライン化・延べ時間削減（テレワークへの早期切り替えに寄与）
- 社内コラボレーション活性化を目的とした本社オフィスリニューアル、工場の新総合事務所建設

2021 » 2022

New Strategy

2018～2020年の「Denka Value-Up」の成果と新たに 見えてきた課題を整理し、2022年度までの新たな戦略を再設定。
「社会にとってかけがえのない存在」となるために、3つの「Value-Up」を実現する。



事業 Value-Up

「誰よりも上手くできる仕事への集中」による
ポートフォリオ変革とさらなるスペシャリティ化を実現

ポートフォリオ変革

スペシャリティ事業の成長加速

環境・エネルギー

- xEV、5G、半導体、再生可能エネルギー関連市場への拡販
- 時代を先取りした製品群の開発に注力

ヘルスケア

- 新興・再興 感染症対策への積極的な貢献
- 遺伝子検出 による診断、診療分野の デジタル化への対応

高付加価値インフラ

- 海外展開・新規製品開発・不採算製品の抜本的改革加速
- 引き続き重点分野として位置付けるため、新たな成長軌道に乗せる

基盤事業のスペシャリティ化・コモディティ事業の位置付け再定義

- 再構築が必要な事業については2年間でポートフォリオ変革に目途をつける

革新的プロセス

生産プロセス改革

- 目視検査の自動化、ロボット導入、センサー強化など

研究開発プロセス改革

- 研究開発支援システム・マテリアルインフォマティクスの本格的活用

業務プロセス改革・働き方改革

- 会議のオンライン化、書類・決裁のデジタル化、3K職場の撤廃

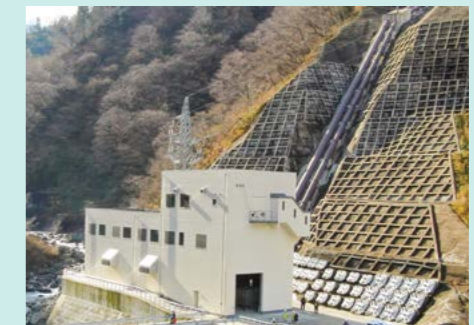


環境 Value-Up

2030年度に温室効果ガスを50%削減(2013年度比)
2050年度のカーボンニュートラル実現を追求

SDGsを羅針盤に、環境負荷低減を経営の根幹に位置付け、温室効果ガス削減と資源循環への貢献に注力。ポートフォリオ変革やクリーンエネルギー利用拡大などのさまざまな取り組みにより、2030年までに温室効果ガスを50%削減、2050年までの「カーボンニュートラル」達成を目指す。

- ポートフォリオ変革
- クリーンエネルギー利用拡大や高効率ガスタービン発電の導入
- 環境貢献製品や環境負荷低減技術
- CCUS（二酸化炭素の回収・貯留・有効利用技術）の開発と実装展開
- ケミカルリサイクル技術
- 製品ライフサイクル（LCA）全体の温室効果ガス排出量削減



新青海川発電所



人財 Value-Up

「働きがい」や「仕事を通じた成長」を
一人ひとりが実感できる企業に

2020年に策定した「新しい働き方」についての指針をもとに、ポストコロナ時代にも通用する仕事のあり方を追求していく。ダイバーシティや働き方改革などのさらなる推進により、社員一人ひとりが「働きがい」や「仕事を通じた自分の成長」を実感できる企業を目指す。

- 「スペシャリティ人財の確保」「ダイバーシティの推進」「働き方改革」のKPI設定
- 評価・採用・育成・労働環境などの制度改革
- 将来の経営幹部候補早期育成への人財教育と大胆な組織・人財の新陳代謝
- 健全な成長に向け、社員が十分に能力を発揮できる環境づくりなど、健康経営の推進



2年間の準備期間をもとに次期経営計画へ



株式会社 SBI 証券
企業調査部 シニアアナリスト

さわと まさみ
澤砥 正美氏

PROFILE
米国大手化学企業の日本法人を経て、1990年に化学業界のアナリストに転身。以来、30年以上にわたって、化学・合繊業界調査および企業分析に携わる。

グローバルを舞台に さらなる存在感を発揮する企業へ

「Denka Value-Up」により、「Specialty-Fusion Company」の実現を目指すデンカグループ。
株式会社SBI証券のシニアアナリストである澤砥正美氏に、今後2年間の取り組みに期待することをお伺いしました。

スペシャリティー化による 収益拡大が際立った3年間

——2018年から2020年までの「Denka Value-Up」について、どのような感想をお持ちですか？

当初計画の営業利益420億円という目標は未達だったものの、過去最高益の更新をはじめ、営業利益率目標を概ね達成するなど、収益の拡大が際立った3年間だったと総括します。新型コロナウイルス感染症による需要の減少を受け、2020年度は化学企業の多くが減益となりました。その中で、デンカが収益を拡大できたのは「Denka Value-Up」におけるスペシャリティー化戦略のもと、環境・エネルギーとヘルスケア領域において着実な成果を上げ

ることができたからです。環境意識が高まる市場のニーズを的確に捉えたEV関連製品や、新型コロナウイルス抗原迅速診断キットの早期開発・販売など、スペシャリティー事業に資源を集中させる戦略が奏功したものだと考えています。スペシャリティー化率97%という数値にも、その成果が見て取れますね。

一方で2020年度は、社員の皆さまにとって、業績への貢献だけではなく、デンカの「社会貢献」を実感した年だったのではないのでしょうか。新型コロナウイルス治療薬候補である「アビガン®」の原料「マロン酸ジエチル」の生産再開は、社会的な意義が非常に大きなプロジェクトでした。この取り組みは、必ずしも大幅な収益拡大に寄与した訳ではないでしょう。世界規模での緊急事態の中でも、社会的責任を果たしつ

つ持続的に成長できる企業体を目指す同社の姿勢、そして、短期間に総力を挙げて生産再開を実現した社員の皆さまの「技術力」と「チームワーク」は、多くのステークホルダーに好意的に受け取られたのではないかと考えています。

3つの Value-Up に寄せられる ステークホルダーからの 大きな期待

——今後2年間の取り組みで実現する「事業」「環境」「人財」の「3つの Value-Up」への期待を教えてください。

まず「事業 Value-Up」では、ポートフォリオ変革と革新的プロセスを推進し、スペシャリティー事業の成長加速を進める経営戦略を評価しています。ポート

フォリオ変革は、2020年までの「Denka Value-Up」においても進展していますが、今後2年間の取り組みでは、不採算事業の抜本的な改革を進める必要があると考えています。基盤事業のスペシャリティー化やコモディティー事業の位置付け再定義においては「再構築が必要な事業については2年間でポートフォリオ変革に目途をつける」と明言されていることから、今井社長のもと、組織再編により事業ポートフォリオ変革が加速すると予想しています。これにより、スペシャリティー化率のさらなる向上を期待しています。

また「誰よりも上手くできる仕事への集中」というユニークなキャッチフレーズも印象的です。分かりやすく親近感もあり、社員の皆さまも共感が持てるのではないのでしょうか。社員の業務効率化を積極的にサポートする経営戦略を明確に打ち出している化学企業は非常に限られています。目視検査の自動化やロボット活用などのDX（デジタル・トランスフォーメーション）により、生産プロセス改革を推進することで、今後2年間で働き方改革にどのような効果が現れるかを注視していきます。

次に「環境 Value-Up」では、2050年度でのカーボンニュートラルの実現を正式表明したことに、全てのステークホルダーからの期待が高まっていると推察しています。特に、CCUSの開発と実装展開やケミカルリサイクル技術の導入など、サステナビリティに向けた取り組みを具体的に挙げていることは、株式市場から高い評価を得られるでしょう。デンカはもともと水力発電などのクリーンエネルギーを積極的に利用しており、化学企業の中ではカーボンニュートラル達成の確度が高いと考えています。

まずは、2030年までの温室効果ガス排出量50%削減というターゲットに集中し、前倒しで達成していただくことを期待しています。デンカには、ぜひ環境分野でのリーダーシップを発揮し、

化学業界をけん引する存在になっていただきたいですね。

最後に「人財 Value-Up」では、「スペシャリティー人財の確保」「ダイバーシティの推進」「働き方改革」に具体的な目標（KPI）を設定していることを評価しています。特に注目しているのは、女性管理職を4年間で2倍にするという目標設定です。ダイバーシティの推進は社会全体の課題となっています。性別に関係なく、能力で判断する仕組みを構築することは、社員の「働きがい」や「モチベーションアップ」につながるものと期待しています。

デンカの一員であることを誇りに 世界で存在感のある グローバルカンパニーへ

——最後に、デンカグループ社員へのメッセージをお願いします。

私は30年以上にわたって化学企業の分析に携わってきましたが、世界を見渡しても、100年以上の歴史を持つ化学企業はごくわずかです。世界シェアNo.1を誇る高付加価値製品を数多く有するデンカの存在感は、日本のみならず、グローバル市場においても際立っています。このような「事業のサステナビリティ」を実践できているのは、成長事業に資源を投資し、スペシャリティー技術を拡大させ、市場のニーズに応えるという「好循環」を実現できているから。このような素晴らしい会社にいることに「誇り」を持っていただきたいと思っています。

「Specialty-Fusion Company」を掲げる成長ビジョンのもと、今後2年間の取り組みを通じて、デンカが世界でさらなる存在感を発揮するグローバルカンパニーになっていただくことを願っております。

※「アビガン」は富士フイルム富山化学株式会社の登録商標です。

Keywords キーワード解説

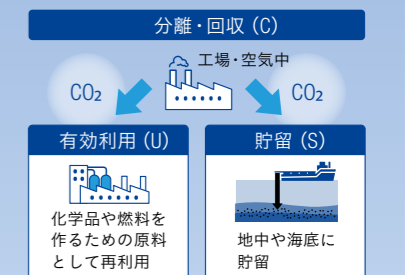
01 | 生産プロセス改革

「3K職場」を撤廃し、働きやすく安全・安心な現場を実現するために、デンカグループは、デジタル化や自動化、DX導入などの「生産プロセス改革」を推進し、操業や品質の安定化、生産性向上を実現します。



02 | CCUSの開発と実装

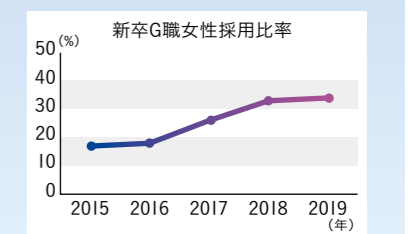
CCUSはプラントで発生する排ガスに含まれるCO₂を他の成分と分離して回収し、大気への放出を防ぐ技術です。デンカは2030年までにCO₂回収技術の実装化を実現することを目標に、国立研究開発法人産業技術総合研究所と連携して開発を進めています。



CCUS：Carbon dioxide Capture, Utilization and Storage（二酸化炭素回収・貯留・有効利用技術）

03 | 女性管理職4年で2倍

デンカは、2024年度までの4年間で、女性管理職の割合を2倍にすることを目標に掲げています。新卒G職（専任職）採用の女性比率30%を維持し、管理職候補の母集団を拡大します。



No. 08
“直感”の余白

Deportare Partners 代表 / 元陸上選手



為末 大氏

1978年広島県生まれ。スプリント種目の世界大会で日本人として初のメダル獲得者。男子400mハードルの日本記録保持者（2021年5月現在）。現在は執筆活動、会社経営を行う。Deportare Partners代表。新豊洲Brilliaランニングスタジアム館長。Youtube為末大学（Tamesue Academy）を運営。主な著作に『Winning Alone』『走る哲学』『諦める力』など。

世界から学び、「好き」と「得意」を見つめ直す

「世界を知る」と「自分を知る」こと。世界を舞台に戦う上で、僕はこの2つを大切にしてきました。「世界を知る」とは、点在するベストプラクティスを学ぶことです。インターネットでトップ選手の練習風景を視聴できる現代。でも僕は“表”に出ていないところにこそ、大事なことが隠されていると考えています。現役時代、ジャマイカチームの練習を現地で見学する機会がありました。映像でよく見ていたのは競技場のトラックで走る姿だったのですが、何と彼らはデコボ

コと穴が空いた芝生の上をずっと走っているんです。トラックでは否が応でもスパイクが引っ掛かりますが、土の上ではそうはいかない。きちんと地面を踏む感覚を繰り返し覚えていたんです。これは、活字にも動画にも出ていない、現場でしか知り得ない情報。「世界を知る」ためには、物事の“裏”を見ることが必要だと痛感しましたね。

しかし、「世界を知る」だけでは必ず壁にぶつかります。それは、体型や文化的影響、言語による認識の違いなど、模

倣だけでは超えられない壁です。そこで必要なのが「自分を知る」こと。つまり「変えられない自分を認める」ことです。長所も短所も“個性”と捉え、自分を最大限に生かし、戦略的に勝てる方法を見出さなければなりません。そのためにはどうすればいいか。僕は、最終的に「好き」と「得意」を定義することだと考えています。「好き」とは、やっているだけで楽しく感じること。「得意」とは、自分だけには息をするようにできてしまうことです。僕にとっ



為末氏が館長を務める新豊洲Brilliaランニングスタジアムにて

での「好き」は考えること。「得意」は大きな歩幅で走ることでした。これは裏を返すとピッチが出ないという短所ともとれます。ですが、僕はこれを長所と捉え、100mから、自分を生かせる400mハードルへと転向。世界で結果を残すことができました。既にあなたも自分の「好き」と「得意」に気付いているはず。それをいかに言語化し、戦略に落とし込めるかが大切なのだと考えています。

イノベーションであるほど“失敗”に見える

僕はイノベーションとは、狙って起こすものではないと考えて

います。走高跳を例にとると、1968年、フォスベリーという選手が従来の跳躍スタイルだったベリーロールではなく、世界で初めて背面跳びを成功させ、五輪で金メダルを獲得しました。でも、この背面跳びは突然生まれた訳ではなく、実は最も初歩的な跳び方とされる「はさみ跳び」が崩れたもの。言わば、失敗です。一見、失敗に思える目の前の出来事を、イノベーションだと気付く力が必要なのです。

実際にフォスベリーと話した時も「直感的に上手くいくと思った」と言っていました。実はこの

“直感”もイノベーションにおける重要な要素だと考えています。ある研究では、人間の勘とは“身体的な反応”だとされています。つまり、勘がいい人とは、身体に起きたサインをキャッチできる人のこと。“直感”とは、多様な経験を身体に蓄積することで身に付けた能力なのです。これを論理的に説明することは難しく、ビジネスでは敬遠されがちですが、“直感”の余白を残しておくことで、思いがけないブレイクスルーが生まれるのかもしれない。

特集 東日本大震災から10年

想いを伝え、未来につなげる

東日本大震災の発生から10年が経ちました。

これまでデンカは、特殊混和材や肥料、コルゲート管、雨どいなどの製品を通じての復興支援活動に取り組んできました。

同時に、延べ900人以上がボランティア活動に参加し、被災地の方々との交流を図ってきました。

これまでの復興の歩みを振り返るとともに、今後の支援のあり方を考えます。

Amazing
the
World
with Innovation



復興への歩み 被災地の方々と共に

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震発生から 現在までを振り返ります。
たくさんの方と出会い、つながりながらデンカは復興 支援活動を続けています。

2011

3月11日
東北地方太平洋沖地震が発生

3月17日
日本赤十字社に
2,000万円の
義捐金を寄付

7月
東日本旅客鉄道株式
会社(JR東日本)より
感謝状を拝受

東日本大震災で被害を受けた東北新幹線の早期復旧への迅速な対応が評価され感謝状をいただきました。

7月
被災地ボランティア支援プログラムを制定・社員ボランティア活動をスタート

会社と社員が協力して支援活動を進める「被災地ボランティア支援プログラム」を制定しました。



2015

3月
南三陸ボランティア感謝のつどいに参加

町の復興の節目として開催された集いに、全国の災害ボランティアが招待されました。

6月
第9回 災害復興・整備支援会議開催

参加メンバーで陸前高田市嵩上げ工事を視察。



2017

6月
デンカ農園
取り組み開始

南三陸町の農家の方から農地の一部を借り受け、地域の皆さまとの交流の場として「デンカ農園」を開設。サツマイモ600株を植え付けました。

10月
デンカ農園で収穫祭を開催

地域の方々をお招きして第一回目の収穫祭を開催しました。



2019

5月
復興支援日本酒『tumugu』プロジェクトスタート

日本酒の原料となる被災地の米(南三陸町産ひとめぼれ)の稲作を開始。



2021

5月
2021年度版『tumugu』稲作開始



2012

2月
災害復興・整備支援本部を設立

復興を効率的に支援するため「災害復興・整備支援本部」を設置。復興に必要な製品の提供を開始しました。

6月
災害支援カタログ完成

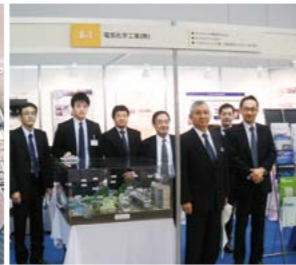
これまで事業別だったカタログを1冊にまとめ、事業の垣根を越えて広く被災者や復興関係者に紹介するための復興資材として制作しました。

9月
ジオラマ展示物完成

当社資材がどのような場所で使用されるか、一目で理解していただけるジオラマを各種展示会で設置。

6月
「EE東北」に初年度より出展

「復興へ、今こそ活かそう新技術」をキャッチコピーとした建設技術公開展「EE東北」に出展し、「デンカ クリアショット 低粉塵吹付け工法」をはじめとする製品を展示しました。



2016

2月
第13回 災害復興・整備支援会議開催

後の「デンカ農園」「tumugu」へとつながる、南三陸町在郷地区での農地再生活動(暗渠施工と施肥指導)を決定しました。

12月
デンカ労働組合ボランティア活動スタート

これまでに延べ182人がボランティアに参加。

4月
新入社員のボランティア活動スタート

新入社員研修の一環として被災地でのボランティア活動を開始。現地の方々との交流を深めました。

2018

10月
デンカ農園、2回目の収穫祭を開催



災害復興・整備支援本部会議を設立

2012年2月、早期の被災地復興に寄与すべく、セメント部、特殊混和材部、肥料部、住設・環境資材部の本社社員と東北支店員をメンバーとして発足し、第10回会議より物流統括部も参加しました。9年間の活動で本会議20回、被災地域への視察5回、各種公共機関の方による出前講座5回を実施。復興需要の獲得を通じて社会的貢献を果たすべく、部署の垣根を越えて誇りと信念を持って取り組みました。



第18回開催時、復興の重要拠点であるJヴィレッジにて

デンカ農園収穫祭

2017年10月21日、南三陸町在郷生産組合の方々をお招きしてデンカ農園の収穫祭を開催しました。同年6月に植え付けたサツマイモの芋掘りを社員と共同で行った後、芋煮・焼き芋と一緒に楽しみました。「来年も待っているよ」と声をかけてくださる農家の方もいっしょり、地元の方々との交流を深める良い機会となりました。



デンカと社員の復興支援活動 思いを束ねて被災地へ届ける

この10年の間に、デンカと社員はさまざまな復興支援活動に取り組んできました。それらの一部をご紹介します。



名古屋支店
アグリ
プロダクツ課
なかにし ひろかず
中西 啓和
'16年5月～'20年9月まで東北支店に在籍。



本社
資材部
やまがた ひでたか
山形 秀剛
震災当時、東北支店で復旧活動に従事。



大阪支店
アグリ
プロダクツ課
もりもと けんた
森本 健太
'12年1月～'16年3月まで東北支店に在籍。

津 波による塩害や放射能での汚染により、東北地方の多くの農地が被害を受けた。その復興に大きく貢献したのがデンカの肥料だ。震災後、山形は全農やJAと協力しながら農家の方々に製品の説明をして回った。「被災されて農地も心もダメージを受けている方々に、今ここで当社の製品を使っただけならば必ず農地はよみがえります、と訴えました。製品説明自体はいつもやっていたことですが、より使命感を持って取り組んでいました」

肥料は店頭に並べておけば売れるというものではなく、それぞれの農地の課題に対して適切な製品を提案する必要がある、と中西は説明する。「営業

陣の地道な活動が、東北で当社製品の採用を広めるきっかけになりました」。森本もそのような「ソリューション営業」こそがデンカの伝統だと力を込める。「先輩方が蓄積してきたノウハウとお客様との信頼関係があり、それらが復興支援にも生かされていると感じています」。加えて中西が強調するのが、東北支店で技術顧問を務めてくださった方々の功績だ。「横山さんと、昨年お亡くなりになった杉田さんが奔走し、当社と農家の方々のつながりをより強いものにしていただきました」

これまでの間に多くの農家の方々がデンカの製品を使い、効果を実感していただいている。「『全く芽が出なかったのに、

デンカさんの肥料を使ったらびっくりするくらいに根が張っているよ!』と農家の方が喜んで電話をかけてきてくださいます。感動しますよね。被災地での活動から得られたデータは、現在のバイオスティミュラント事業にも生かされています」と山形。森本も得られた知見を今後に生かしていきたいと話す。「不良環境にも負けない作物づくりに貢献する製品開発を進めています。培ってきた技術力、ソリューション、ノウハウを育て、次世代につなげていくことが私たちの役割です。脈々と守り育てられてきたデンカのノウハウは後世にも伝えられ、新たな芽吹きとなるに違いない。

日本の大動脈を一日も早く復旧する

特殊混和材によるインフラ整備



東北支店
特殊混和材課
かわの まさひろ
河野 真信
東北支店で復旧工事全般に携わる。



特殊混和材部
ひろせ たかひろ
廣瀬 豪平
震災当時、本社でお客様対応を担当。



特殊混和材部
やなぎさわ なおひと
柳沢 直仁
現地の工事現場で製品指導を担当。



特殊混和材部
かつた よしやす
勝田 義康
東北支店でトンネル用急結材の営業を担当。

マ グニチュード9.0。観測史上最大規模の地震で甚大な被害を受けた東北新幹線の復旧に、デンカの製品が大きな役割を果たしている。地震発生後、当社は特殊混和材を高架橋復旧工事の現場に緊急出荷。倉庫から送るだけでなく、青海工場から現場へ直接納めるケースもあった。「オーダーから納品までの時間をどれだけ短くできるかが勝負。工場、支店、代理店と連携をとって供給に務めました」と河野は当時を振り返る。

そのころ本社では、廣瀬はJRをはじめとするお客様からの問い合わせに昼夜を問わず対応。柳沢は緊急車両登録をした車で東北へ走り、数多くの現

場を飛び回って製品の指導に当たった。「お客様と直接話しながら工事を進めていく。それが先輩方から受け継いできたデンカのスタイルです。大地震発生後という特別な状況ではありましたが、いつも通りの対応をしましたが、いつも通りの対応をしましたが、いつも通りの対応をしましたが、いつも通りの対応を...」

デンカの底力は震災後の高

速道路（復興道路）建設時でも発揮された。トンネル現場では吹付コンクリートの品質が安定せず、工事遅延の状況に陥っていた。そこでデンカは、コンクリートの性状を安定させる混和剤「クリアップα」を早期に開発、工事遅延の状況の改善に寄与し、復興道路建設に貢献した。「研究所、本社、現場が三位一体で取り組んだ結果です。ゼネコン各社からは当社の対応力への高い評価を頂いています」と誇らしげに語る勝田に河野も続く。「これまで培ってきたものがあるから大災害時やその後の復興工事の際にも力を発揮できる。後輩たちにも受け継いでもらい、デンカの力をさらに高めたいってほしいですね」

Amazing
the
World
with Innovation

東北の農業を守りたい
肥料による農地の復興



当社の肥料を散布する様子

社員ボランティア活動の継続的な実施 私たちの役割は “つなぐこと”



在郷営農組合の皆さんと東北支店社員

2011年7月の被災地ボランティア支援プログラムの制定以来、延べ917人の社員がボランティア活動に参加してきました。「デンカ農園」をはじめとする多くの活動を通して、被災地の方々と交流が進んでいます。



メディカル
サイエンス部
よこかわ ゆういち
横川 裕一

'11年10月から'13年3月まで東北支店長を務める。災害復興支援本部の東北地区の本部長も兼務。



労働組合本部
やまもと しゅいち
山本 寿一

当時、労働組合の副委員長として復興支援活動を推進。労働組合員の被災地派遣を取り仕切る。



伊勢崎工場
高分子加工研究部
いしはら えいか
石原 瑛果

新人研修時（'19年）と'20年にボランティア活動に参加。デンカ農園での農作業などに携わる。

一人ひとりの思いが集まって 大きな力になる

横川 2011年10月から約1年半、私は東北支店長として社員ボランティア活動のサポートをしていました。毎週のように本社や研究所などから多くの社員が東北に集まってくることが本当にうれしく、頼もしかったことをよく覚えています。冬はひときわ寒く、夏も暑い東北に週末をつぶして駆けつけてくれる。ありがたい限りでした。被災地の状況をテレビなどで見て、自分も役に立ちたいという思いで参加してくれたのでしょう。

石原 そうですね。2011年の震災当時、私は高校生でした。当時の状況をテレビで見ていただけだったので、自分にできることはないかという思いはずっとありました。現地へ実際に行って作業したり、地元の方から生の声を聞けたりしたのは自分の人生の中でとても大きな出来事だと思います。

山本 一度経験すると、その後も継続して参加する社員も多いですね。実際に行ってみるといろいろ感じるものがあるし、現

地の方々の助けになりたいという思いが強くなるのだと思います。

横川 いろいろな部署、年代の社員が参加しているので、普段一緒に仕事をしていないデンカの仲間とも触れ合うことができます。ボランティアは横の交流を深めるとも良い機会にもなっています。

山本 全くその通りですね。昔に比べて今の世の中は段々と個人主義の傾向が強くなってきているように思います。しかし、仲間と横のつながり、コミュニティの大切さ、助け合いの精神、ボランティアを通して社員一人ひとりがこれらを学ぶことは、デンカが社会の中で歩いていく上でとても大きな力になるのではないのでしょうか。

デンカのタスキを つなぎ続けていこう

横川 ボランティア休暇制度をはじめ、会社が社員の背中を後押ししたのも大きかったですね。肥料や特殊混和材などの製品で復興を支えることに加えて、会社全体で

被災地に貢献しようという姿勢を感じることができました。

石原 私が初めてボランティア活動に参加したのは2019年の新人研修のときです。新人研修にボランティア活動が含まれているなんて、入社するまで知りませんでした。会社として活動を重視していることが伝わってきました。

山本 それはとても良く分かります。震災当時、デンカ労働組合としてのボランティアの派遣を検討していましたが、二次災害や活動時の怪我の恐れがあり難しいと考えていました。しかし会社が行う復興ボランティアに参加を希望するとスムーズに承認が下り、2012年から2019年までの8年間で182名という多くの組合員がボランティア活動に参加しました。真摯な姿勢で誠実な対応をする。これはデンカに脈々と受け継がれてきたDNAなのだと思います。助けが必要な方々に対して、会社としても、社員一人ひとりもサポートをする。そういう会社に勤めていることを光栄に思います。

Amazing
the
World
with Innovation



オンライン座談会を開催

石原 私たちはそのDNAを引き継いでいかなければいけないと感じます。ボランティアに全社員が参加するのは難しいでしょう。しかし、参加した人が何をしたのか、どう感じたのかを発信することで、周囲の人に参加を促したり、支援のあり方を考えるきっかけになるかもしれません。

横川 私自身がボランティアに参加した際、ボランティアセンターの受付の方に「デンカさん、また来てくださったんですね」と言われたことがあります。「ボランティアの方」ではなく「デンカさん」と呼んでくれたことをうれしく思いました。私たちは同じデンカの仲間たちからのタスキをつないでいるのだと感じます。

デンカ農園の今

当社の暗きよパイプと肥料をご利用いただいていた南三陸町の農家の方々から農地の一部を借り受けて、地域の皆さまとの交流の場として「デンカ農園」を2016年に開設しました。2017年6月には東北支店の社員の手でサツマイモを600株植え付けし、10月には地域の住民の方々を招いて芋掘り・芋煮などの収穫祭を開催しました。今後も東北の被災地の復興と農地再生への願いをこめて農園を運営していきます。これまで運営に携わってくださった地域の方々と東北支店のお二人に、デンカ農園への思いをお聞きました。

地域の方々より

活気を取り戻すきっかけに

震災当初、下を向いていた在郷地域の方々がデンカの皆さんと復興活動で一緒に汗を流し、食事をする中で関係性が築かれました。デンカ農園は、地域が活気を取り戻すきっかけになったと実感しています。



南三陸町商工観光課
ちば ひろく
千葉 啓

一緒に歩いてくれたことに感謝

ここまで長い期間、南三陸町に寄り添っていただき、感慨深いものがあります。デンカ農園は今では作物が収穫できる圃場となりました。新入社員研修の場ともなり、多くの若い方々と一緒に農作業で汗を流し、交流できたことも思い出の一つです。



在郷営農組合 組合長
にしくぼ なほこ
西條 栄福さん

皆さんとの再会が楽しみ

2017年、2018年の収穫祭を通じて、デンカ東北支店の方々と地域住民の約50名が交流できたことが印象に残っています。身も心も現地に寄り添っていただいています。新型コロナウイルスが終息したらぜひ皆さんとお会いしたいですね。



在郷営農組合
うめざき まさひろ
梅沢 正則さん

デンカ社員より

これからも胸を張って

この10年を振り返って、「デンカの社員で良かった」と胸を張って言えることがとても幸せです。ただ、10年は一つの区切りであり、終わりではありません。復興はまだ道半ばです。これからも被災地のためにできることを、胸を張って継続していきます。



東北支店 支店長
たかはし こうや
高橋 晃哉

地域に根ざした活動を継続

津波の被害で荒れた畑も再生できること、地域とのつながりの大切さを学びました。地域に根ざした幅広い活動を継続し、企業理念を引き継いでいくことが、デンカのさらなる発展につながると思います。



東北支店
むら かずみ
三塚 和美



山本会長が振り返る この10年間



代表取締役
会長
山本 学



復興支援酒「tumugu」 (非売品)

津波で浸水した宮城県南三陸町の田んぼで収穫した「ひとめぼれ」を使用。圃場整備にはデンカアゾミン(株)と日之出化学工業(株)の肥料が使われています。ネーミングは、復興ボランティアに参加した2019年度新入社員の公募により決定。被災地とデンカのつながり、携わってきた人々の想いを「つむぐ」という意味が込められています。

社会の幸福に貢献し続ける企業であるために

震災に突きつけられた 企業としての課題

10年前の3月11日、出張先のホテルでまんじりとしめない夜、テレビに映し出された東北の沿岸を襲う津波の惨状に、言葉を失うと同時に、知らず知らず涙が滲んだのを覚えています。

2万人近くの方が命を失い、10年の時を経て遺族の方々の心の傷は癒えていません。福島原発事故を含め、多くの被災者は、生活基盤を根こそぎ奪われ、いまだ帰郷もままならない状態に置かれています。

震災直後、サプライチェーンの寸断などで傷ついた当社の事業は、従業員各位の努力により危機を乗り越え、今は成長軌道に復帰しています。しかし、震災の記憶は、それを体験した私たちの脳裏に深く刻まれました。自然の驚異が、今や想像上の物語ではなく、いつでも起こりうる巨大なリスクとして実感され、あの時を境に、私たちの世界観も大きく変貌したのだと思います。

震災からの復興は、被災者だけではなく、震災の恐ろしさを共に体験した国民全体の重い課題です。国民の安心と幸せを取り戻すという課題を避けては、企業活動も一歩も前には進まない。ESGやSDGsを単なるお題目にしないためにも、会社全体で、真の復興を実現するために何ができるか、また再びこのような大災害が発生した時を想定して命を守るために何をすべきかに、しっかり向き合っていく必要がある。それが10年の時とともにますます強まる思いです。

志を持って動いた 社員こそがデンカの財産

この10年間、デンカはこの課題に真正面から取り組んできました。

被災地へのボランティア派遣は、今では会社としての継続的取り組みとなっていますが、

もともとは被災地で苦勞されている方々の一助になりたいという社員の純粋かつ自発的な動機からスタートしています。このような社会貢献に向けた積極的な姿勢を持つ社員の存在は、デンカにとっても貴重な宝物です。彼らの強い思いを契機とした弛まない取り組みにより、被災地の方々と絆が強まり、また、社会的使命の遂行による会社および従業員の誇りにもつながったと確信しています。

それに加えて、当社では、震災直後に災害復興・整備支援本部を設けて、事業展開を通じた復興支援に注力してきました。農業復興に役立つ各種肥料やコルゲート管、建設資材としてのセメント、特殊混和材、仮設住宅向けの雨どいなど、数多くの製品やサービスを供給することによって、復興の加速化に大きく貢献してきました。

この10年間の活動を通じて、当社は社会に貢献できる数多くの価値ある独自の製品や技術、何より人財を豊富に有しているという自信と学びを得ました。

デンカにしかできないスペシャリティーに磨きをかけることで、社会の幸福と会社の成長を両立させていくことは、SDGsを持ち出すまでもなく、デンカと私たちが成長するための必須条件であり、現在進行中の経営戦略“Denka Value-Up”の基本精神であります。この10年間の実績は、まさにこの理想が実現可能であることを証明していると思います。

今後も、自然災害のみならず、脱炭素などの世界的な課題にしっかり向き合い、人々の幸福に大きく貢献できる事業活動を展開し、従業員はもとより、すべてのステークホルダーが誇りに思える、社会に真に必要なとされる企業を目指していってほしいと期待しています。

最後に、ボランティアに進んで参加された方々、復興支援活動に関与された多くの従業員に心からの感謝を申し上げます。

DENKA TOPICS

2021年4月～6月のデンカグループの主なトピックスをご紹介します。

Apr. 「健康経営宣言」を制定

社員と家族の健康保持・増進の取り組みをさらに発展させた「健康経営宣言」を制定した。健康保持・増進を経営の重要課題と捉え、昨年には新型コロナウイルス収束後を見据えた新しい働き方の全社方針を策定。「真に社会に必要な企業」を目指し、今後とも社員と家族の健康と幸せづくりに取り組んでいく。



May 球状マグネシア 「半導体オブ・ザ・イヤー」優秀賞受賞

当社の機能性セラミックス「デンカ球状マグネシア」が、電子デバイス産業新聞主催の第27回「半導体・オブ・ザ・イヤー」半導体用電子材料部門の優秀賞に選ばれた。高放熱性が環境負荷低減に貢献する本製品の用途は、風力発電、通信基地局など幅広い。



June コンクリート凝結効果促進材 「デンカACF材」が現場で初採用

当社のセメント・特殊混和材で培った無機材料設計技術を応用して清水建設と共同開発したコンクリート凝結効果促進「デンカACF材」が、青森県中泊町の実工事で初めて採用された。寒冷期にはコンクリートの凝結時間が長くなるが、本材は生コンクリート車に投入する簡易な方法で、通常期と同レベルの凝結時間の確保が可能。今後、さまざまな現場に展開していく。



June 新型コロナウイルスの 変異部位検出用研究試薬を販売開始

6月16日、PlexBio社製の研究用試薬「IntelliPlex™ SARS-CoV-2 Variant Analysis Kit」を測定機関向けに販売開始した。当社が株式の33.4%を保有し業務提携するPlexBio社(台湾)と共同開発し、東邦大学医学部と共同で検証実験を実施。本試薬は、専用装置と併用して変異株にみられる計10種の変異部位を同時検出する。



Apr. 米国向けに 新型コロナウイルス抗原迅速診断キットを供給

当社は米国 Xtrava Health社と提携し、当社の新型コロナウイルス抗原迅速診断キット「クイックナビ™-COVID19 Ag」を、「SPERAT™ COVID19 Ag Test」として供給する。米国では需要継続すると予測されており、Xtrava Health社は、米国食品医薬品局(FDA)緊急使用許可取得に向け臨床試験を進め、今年中の販売を目指している。



June “Denka Athletics Challenge Cup 2021” 開催

6月5日、6日に当社が特別協賛する陸上の日本グランプリシリーズ「Denka Athletics Challenge Cup 2021」がデンカビッグスワンスタジアム(新潟県新潟市)で行われた。



June がん治療用ウイルスG47Δ製剤 「デリタクト®」が承認

当社が東大医科学研究所 藤堂具紀教授と生産技術開発を進めてきたがん治療用ウイルスG47Δ製剤「デリタクト®(一般名:テセルパツレブ)」について、国内で条件及び期限付き承認に該当する製造販売承認を第一三共(株)が取得した。悪性神経腫瘍を対象としたがん治療用ウイルス製剤の承認は世界初。第一三共の委託を受け、当社が生産を担う。 ※「デリタクト」は第一三共株式会社の登録商標です。



June 同時迅速診断キットの 国内製造販売承認を取得

新型コロナウイルス抗原とインフルエンザウイルス抗原を一つのデバイスで同時に検出できる抗原迅速診断キットの国内製造販売承認を6月16日に取得した。両ウイルス抗原の判定が10分で可能に。製品名「クイックナビ™ -Flu+COVID19 Ag」として、当社と販売提携先の大塚製薬より販売を予定している。



視界良好



Japan

デンカアステック
営業本部 東日本支店 営業課
かわの てつや
河野 哲也

ジムに通って体を鍛えております！

2013年12月入社。東北地区をメインに樹脂製・金属製の雨どいを販売。既存顧客のフォロー、新規設計活動などに携わる。

几帳面な性格からか、洗濯もの、洗いかけの食器など視界の中に家庭の雰囲気を感ずるものがあると、仕事に集中できなくなってしまうため、始業前に妻と分担して片づけを終わらせています。そしてひと段落したら、毎回お気に入りのコーヒーを淹れ、その香りを楽しみながら仕事モードに入ることが、私の「ON」のルーティンです。天気がいい日の「OFF」は、2歳になる娘と近所に散歩へ出かけ、外の空気を感ずながらリフレッシュしています。



日本の河野さんはどうですか？

Set clear goals and expectations



USA

デンカコーポレーション
Life Innovation and New Business Development
サム アリ
Sam Ali

USAのSamさんはどうですか？

自然の中にとくと、心が澄みわたります

2015年9月入社。米国を中心に、グローバル規模でヘルスケア分野の新規事業や新製品の開発を主導。現在は、新型コロナウイルス抗原迅速診断キット「クイックナビ™-COVID19 Ag」のFDA緊急使用許可取得と販売に向けて米国市場を開拓している。

コロナ禍でも、生産性やパフォーマンスに大きな影響はありませんでした。Zoomやデスクトップ、モバイルコミュニケーションなど最新のワークツールを駆使して重要なタスクに取り組み、迅速にプロジェクトを進行できました。通勤時間がなくなり、仕事に集中できる時間が増えたこともメリットでした。



日本の白谷さんはどうですか？



Japan

デンカ
経営企画部
しらたに
白谷 はるか

一日一回の散歩

美術館巡りが大好きです！

2012年4月入社。業務プロセス改革の推進や、海外企業とのアライアンス支援などを実施している。

気分転換と健康維持のために、毎日できるだけお昼と夜に散歩しています。この一年以上毎日のように同じ景色を見ていますが、一日一日ほんの少しずつ季節が移ろっていく様子を感じられることは、とても新鮮です。春になってからは、近所に植わっている満開のバラ、ジャスミン、クチナシの花の素晴らしい香りを目いっぱい楽しんでいます。



ドイツのFrankさんはどうですか？

LINK GLOBALLY, LINK FUTURE

デンカの未来へ、世界の仲間と

デンカグループの仲間 は世界に6,000名。
各国の皆さんに同じテー マで質問してみました。

Theme リモートワークのONとOFFの切り替え、どうしてる？

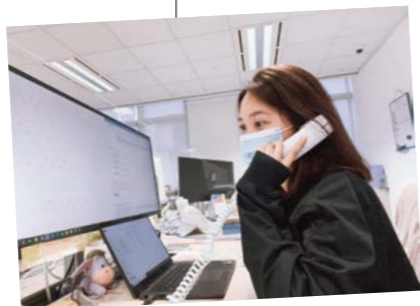
Create physical work separation.

アニメ、漫画、愛犬が好きです！

2017年4月入社。製品の受注管理、国内外への出荷管理などを担当。

ワークスペースとプライベート空間をきちんと分け、仕事に気が散らないようにデスクの整理整頓を心掛けるなどしています。昼休憩には愛犬を散歩に連れていき、気分転換も忘れません。一番のこだわりは、在宅勤務中は必ずクラシックやジャズを流すこと。非常に集中できます。仕事を終えたらワークスペースから出て、心の「仕事」モードをシャットダウンしてからプライベート空間に戻っています。

中国の刘さんはどうですか？



道阻且長、行則将至

人生の道は、いつも順調ではなく、長く続いている。でも、道に沿って前向きに歩いていけば、最後には目標に到達できる。

電化電子材料（大連）
有限公司（DEMD）
生産管理部門
リュウ ティンティン
刘 婷婷

China

趣味は、読書と猫を飼うことです。

2015年1月入社。生産管理部門の管理者として、原材料の安定供給、生産リードタイム管理と納期遵守に努めている。

週1回の買い物や余暇を利用した読書・ウォーキングで、心身ともにリフレッシュしています。入社時には、いつも新鮮な気持ちで仕事へ打ち込むように心掛けています。

最近、パソコン、スマホ、Web会議を活用し、上司やデンカ本社・工場との連絡を密に取ることで、原材料納入、生産段取り、製品の安定提供などを順調に行うことができました。



Germany

Icon Genetics GmbH
Development Department
フランク ティーム
Frank Thieme

家族とハイキングに行くのが好きです！

2008年入社。開発担当マネージャーとして、ノロウイルスワクチンの臨床開発に向けた取り組みの調整、グローバル連携チームによる初期臨床試験の監督を担う。

新型コロナにより、仕事、子供の学校、自由時間が入り混じった生活になりました。在宅勤務で家族といつでも連絡が取れる一方、仕事と家庭生活の境目がわからなくなることもあります。ですが、この状況は世界共通。リモート会議やクラウドシステムなどを活用して、辛抱強さや思いやりも忘れず、仕事も家庭生活も円滑に進めていきます。



Patience and understanding

シンガポールのYeeさんはどうですか？



Singapore

Denka Infrastructure Technologies
Pte Ltd
Special Cement Additives
イー シュー フイ
Yee Shu Hui